

## 第5章 総括

猪ノ鼻(2)遺跡からは、縄文時代と奈良・平安時代の遺構・遺物が発見され、複合遺跡であることが明らかとなった。縄文時代の遺構は堅穴建物跡5棟、土坑17基、奈良・平安時代の遺構は堅穴建物跡3棟、土坑3基、焼土跡1基が検出されたほか、時期不明の土坑1基が検出されている。

遺物は縄文時代中期前葉～中葉の円筒上層式土器を主体として、縄文時代早期中葉、後期前葉、弥生時代中～後期、続縄文時代の後北C2・D式土器、奈良・平安時代の土師器と、これらに伴う剥片石器、礫石器などが段ボール箱で24箱出土した。円筒上層式土器、土師器以外の出土はごく少数である。

以下に堅穴建物跡、縄文時代の土坑についてまとめる。

### 縄文時代の堅穴建物跡 5棟 (SI01、SI02、SI04、SI07、SI08)

〔時期〕 出土土器から以下の3期に分けられる。

- ・円筒上層a式期 (SI01、SI07、SI08)
- ・円筒上層b式期 (SI02)
- ・円筒上層d式期 (SI04)

〔検出位置〕 円筒上層a式期の建物跡は丘陵端部の標高22.0～23.2mに位置している。特にSI01、SI07は並んで位置しているほか、炉形態や主軸方向なども似ており、併存していた可能性もある。円筒上層b式、d式期は円筒上層a式期よりも標高の高い23.4～25.0mに位置しており、時期が新しくなるにつれて高い方へと遷移している。〔平面形〕 円筒上層a、b式期では楕円形を基調としたものと考えられる。円筒上層d式期はSI04が全体を検出できなかつたため不明である。〔柱穴〕 円筒上層a式期のSI07では建物跡の長軸線上に位置するPitが対になって斜めに掘り込まれている状況を検出した(図28)。SI01、SI08でも長軸線上にPitが位置しており、主柱穴である可能性が考えられる。b、d式期では検出数が少なく不明である。〔炉〕 円筒上層a式期では土器埋設炉と地床炉のセットとなる(SI01、SI07)。土器埋設炉は床面中央に、地床炉はそこから離れた場所に位置している。土器埋設炉の炉内にはいずれも土器片が敷かれている。なお、SI07では床面中央にある炉が土器埋設炉から地床炉へと変化した状況を検出した。円筒上層b、d式期は地床炉である。〔周溝〕 円筒上層a式期のSI07、SI08では壁に沿って構築され、斜面下方で開口している。円筒上層b式期では全周に近い状況で巡り、円筒上層d式期では壁際の一部に構築されている。〔特殊施設〕 SI07から周堤状の土盛りと、その内側からピットを検出した。これまでの調査・研究事例から特殊施設と呼ばれるものに相当する。建物跡の長軸線上に位置するのが一般的であるが、SI07では長軸、短軸の軸線上から外れた所に位置している。斜面上方にあたる東壁側から検出した。この場所は、斜面下方の周溝開口部を出入り口と見なすと、室内でも奥壁に位置している。周堤状の土盛りはハの字状に検出されたが、ピットを囲うように弧状であったとも考えられる。Pitは壁を袋状に掘り込んで造られている。堆積土内及び周辺から特殊な遺物は出土しなかつた。

### 縄文時代の土坑 17基

検出状況や遺構の特徴から4細分した(第3章第2節)。この中で主体を占めているのはB群とした13基である(SK04、05、06、07、08、09、14、15、16、17、18、21、23)。南側調査区の標高22.4mラインより上からまとまって検出されている。B群からは分割された石皿や大型の礫が出土する土坑が多く、これらが接合した5基の土坑を検出した(図39)。SK06、08、18では石皿が、SK09とSK15では自然礫が接合した。接合した石皿と礫は完形に復元される事から、意図的に分割して土坑に入れ

たものと考えられる。出土状況を見ると、SK08、18では底面ないしは底面直上から出土しており、土坑が開口していた段階で置かれたものと捉えることができる。しかし、SK06は堆積土下位で20cmほど埋まった位置から出土しており、若干の違いがある（図39）。SK06、SK18の堆積状況は、遺物の上位に黒色土がレンズ状に堆積している。また、SK08では遺物の上に何層か堆積しているが、均一な土質で混入物も少なく自然堆積した状況を示している。いずれの土坑も基質の異なる土が混合して堆積したような状況ではない。このことから、土坑は礫が置かれた後も開口したままであった可能性がある。B群の時期は出土土器や遺構との重複関係から、円筒上層b式期以降d式期以前と捉えることができる。他に縄文時代前期前葉以前の落とし穴と思われる底面に逆茂木痕を有する土坑が1基（SK10）、標高21.8m付近で並んで検出された大型の土坑2基（SK01、20）、詳細不明の1基（SK12）がある。

#### 奈良・平安時代の堅穴建物跡 3棟（SI03、SI05、SI06）

〔時期〕 To-aの堆積状況と出土遺物から以下の3期に分けられる。

- ・8世紀中頃～9世紀初頭（SI05）
- ・9世紀後半～10世紀前葉でTo-a降下以前（SI03）
- ・9世紀後半～10世紀前半でTo-a降下以後に埋没（SI06）

〔検出位置〕 標高22.8～24.6mに位置している。〔堆積状況〕 To-a火山灰の堆積状況は以下のとおりである。堆積土上位にレンズ状に堆積（SI05）、下位にレンズ状に堆積（SI03）、ブロック状に二次堆積（SI06）〔カマド〕 8世紀中頃～9世紀初頭のSI05では北側に造られ、煙道は地下式。9世紀後半～10世紀前葉のSI03では東側に造られ、煙道は半地下式、9世紀後半～10世紀前半でSI06では東側に造られ煙道は地下式である。いずれの遺構もカマドは壊されているが、構築材に使われた粘土は床面から出土しなかった。粘土は持ち去ったか、別なところに廃棄したものと考えられる。SI06ではカマド周辺に遺物が集中し、煙出し孔を塞ぐように自然礫が埋められていたことから、カマドを廃棄する際に祭祀的な行為が行われた可能性がある（図21、22）。〔出土遺物〕 SI05では壺、高台壺、甕、小型甕の略完形個体が1点ずつ出土した（図20）。なお、ロクロ調整が施されているものは出土しなかった。SI03では土師器の出土が少なかったが、槍鉋がカマド袖の検出面から出土した（図11、12）。SI06は前述したようにカマド周辺に遺物が集中していたが、出土した器種は甕、壠だけで、壺が全く含まれておらず器種組成に偏りがある（図21）。鉄製品は刀子のほか器種不明の棒状鉄製品が出土した（図26）。

#### 小結

本遺跡は縄文時代の早期中葉頃から土地利用の痕跡が見られ、縄文時代前期前葉以前には主に狩猟場として使われていた。この状況は、当該期の坪川中流域に見られる傾向と一致する。その後、縄文時代中期前葉の円筒上層a式期に集落が営まれ始め、中期中葉の円筒上層d式期に至るまで続く。なお、谷底平野の底から円筒上層a式土器が出土しており、集落開始期には谷が開析していたものと考えられる。縄文人は、眼前が急激に落ち込んでいる丘陵縁辺部を意図的に選地したのである。しかし、時と共に居住域は標高の高い方へと移っていき、集落の後半には調査区内で土坑群が造られるようになる。これ以降、調査区内では奈良・平安時代に至るまで集落は造られないが、縄文時代後期前葉、弥生時代中～後期、続縄文時代の遺物が少ないながらも出土していることから、何らかの人的活動があったと思われる。8世紀中頃～9世紀初頭期になると再び集落が造られ、その後、10世紀代前半まで続く。堅穴建物跡は3棟しか検出されなかったが、南に2kmほど離れた猪ノ鼻（1）遺跡では当該期の堅穴建物跡が相当数検出されており、遺跡周辺において人的活動が活発化していた状況がうかがえる。

## 引用・参考文献

- 青森県 2005 『青森県史 資料編 考古3』
- 青森県 2013 『青森県史 資料編 考古2』
- 青森県教育委員会 2018 『夷堂遺跡・塚長根遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第590集
- 青森県教育委員会 2019 『後平(1)遺跡・後平(2)遺跡・後平(3)遺跡』  
青森県埋蔵文化財調査報告書第598集
- 青森県教育委員会 2020 『後平(4)遺跡・後平(1)遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書第607集
- 七戸町教育委員会 2007 『二ツ森貝塚』七戸町埋蔵文化財調査報告書第71集
- 村越 潔 1976 「円筒土器に伴う特殊な石器」『東北考古学の諸問題』
- 沼宮内陽一郎 1998 「半円状扁平打製石器の機能面について」『桜峯(1)遺跡調査報告書』  
(青森市埋蔵文化財調査報告書 第36集) 青森市教育委員会
- 小島朋夏 1999 「研究ノート北海道式石冠の分布とその意義」『北海道考古学』第35輯
- 茅野嘉雄 2000 「南郷村畑内遺跡出土のすり石について」『研究紀要』第5号  
青森県埋蔵文化財調査センター
- 藤原秀樹 2002 「半円状扁平打製石器について」『八雲町山越3遺跡・山越4遺跡』  
北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第166集  
財団法人北海道埋蔵文化財センター
- 齋藤 岳 2003 「研究ノート三内丸山遺跡第6鉄塔地区の石器組成と抉入扁平磨製石器の使用  
法について」『特別史跡三内丸山遺跡年報』第6号 青森県教育委員会
- 三宅徹也 2011 「半円状扁平打製石器について」『向田(36)遺跡』  
(野辺地町文化財調査報告書 第17集) 野辺地町教育委員会
- 上條信彦 2014 「「扁平石器」の形態的分布からみた円筒土器文化圏の動態－半円状扁平打製石器、  
抉入扁平打製石器、抉入扁平磨製石器を中心に－」  
『青森県考古学』第22号 青森県考古学会